

心に高き帆を 酒井大岳著「金子みすゞの詩と仏教」より

学生時代、私は行商をして全国を歩きました。家庭用品を40種類ほど箱に詰めて手に提げ、運動靴をはいて、てくてくと歩きまわりました。

そのころ、東京都内には3万人を超える「物売り学生」がいました。どこへいってもなわ張りがあって、私などは何度、売上金をひったくられたかわかりません、半数以上は偽学生だったようです。

そのため、地方へ売りに出ることが多くなりました。大量の荷物を地方の安宿へ送っておき、そこに泊まり込んで毎日売りに出ていきました。

小高い山のとっぺんに座り込んで、ひざを抱えて悲しんだこともあります。故郷から仕送りのある学生たちを恨めしく思いました。本が欲しい、恋人が欲しい、ラーメンが食べたい、映画が観たい、そんなことばかりを考え、大事な荷物を放り投げたりもしました。

そんなとき、心の救いとなるものは、遠い山々であり、流れてゆく雲であり、海であり、帆でありました。

ほ
帆



港に着いた舟の帆は、
みんな古びて黒いのに、
はるかの沖をゆく舟は、
光りかがやく白い帆ばかり。

はるか沖の、あの舟は、
いつも、港へつかないで、
海とお空のさかいめばかり、
はるかに遠く行くんだよ。

かがやきながら、行くんだよ。

40年後に、みすゞさんの「帆」と
出合っています。「やっぱり・・・」と、
深く、深く、うなずきました。

はるかに遠く行くもの、そして、かが
やきながら行くものに、人は勇気づけら
れていくようです。

人はみな、手で引き寄せられない、は
るかなものを見つつ生きていくのではな
いでしょうか。引き寄せようとすればす
るほど、はるかなものは遠ざかり、走り
寄って抱きとろうとすればなおのこと遠
ざかるもののように思えます。永遠に
はるかであってよいのでしょうか。

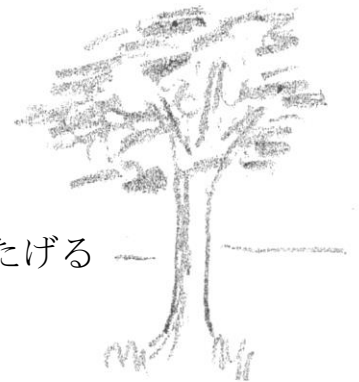
だから「かがやく」のだと思います。

虚子の俳句に助けられる

高浜虚子に『六百五十句』（昭和30年・角川書店）という句集があります。俳誌『ホトトギス』が650号に達したのを記念して刊行されたものです。

当時、私は21歳。学資と生活費をかせぐため物売りに汗を流していました。ある日、世田谷区の“三茶書房”という書店に立ち寄ったとき、この句集を見つけました。豪華本で定価は700円でした。私のためとも思える句が、たくさんありました。これも、これも、と、私はページをめくっていったのです。

一時（いつとき）は、たとひ暑さにあへぐとも
何事もたやすからずよ菜間引（なまび）くも
下萌（したもえ）の大磐石（だいばんじゃく）をもたげる
炎天にそよぎをる彼（か）の一樹かな



とくに、最後の1句には救われた思いがしました。じりじりと照りつける炎天のもと、はるか彼方には一樹があつて、いかにも涼しげに風にそよいでいると言います。「おいで、ここは涼しいよ」、それはまさしくお釈迦さまのお声でありました。

苦しみ悲しみにつきまとわれても、はるか前方に自分を招いてくれる一樹を見いだすことができれば、人はなんとか1歩を踏み出せるのではないかと、そのとき思い、はるかの一樹が菩提樹に見え、走って行ってその樹の前にひれ伏したい思いがしました。

はるかを見やるまなざし

それから37年たって、みずゞさんの「帆」と出合いました。「はるかの沖をゆく白い帆」と「炎天下の一樹」が重なり、「やっぱりこれでよかったのだ」と思ったことでした。

この詩「帆」に励まされて生きている人は多いと思います。みすゞさん関係の書物をたくさん出版されている「JULA出版局」の社長・大村祐子さんは、むかしご苦勞をなさっていたころ、この詩を読んで「チリチリと、胸が焦げた」そうです。きっと大きな力をえられたのだと思います。

「はるかの沖」という言葉がいいですね。「光かがやく白い帆」はもっといいです。それは、自分と遠い世界のものであって、自分の足もとに引き寄せることができません。

しかし、遠くの白い帆を見つめて生きる人は、自分の足もとをしっかりと見とどけられる人でもある、と思うのです。すぐれた俳人が、遠くを見ながら自分の心を詠んでいるのがそれでしょう。

炎天の遠き帆やわがこころの帆 山口誓子

この句を詠まれたころ、作者は病中にあったのですが、その心のはるか彼方には海が広がっていて、いつでもそこに帆があったのです。その帆をみつめることでご自分の晩年の人生を考えておられました。やがて訪れるであろう死に対して、自分はどう立ち向かうべきかと考えておられました。だから作者には帆を題材にした俳句が10句もあります。心の宇宙、心の海原（うなばら）にはいつも帆が見えていたことでしょう。そして遠いけれど、その帆は自分自身でもあったのだと思います。

禅の言葉に「看脚下（かんきゃっか）」（脚下を看（み）よ『仏果園悟（ぶっかえんご）禅師語録』とあります。足元をよく見なさい、仏の教えの真只中だぞ、という意味です。

しかし、「はるかを見やるまなざし」があつてこそその「看脚下」であることを忘れてはならない、と私は思っています。

⑨ 「帆」からは、そういうことまでも学び取らせていただきました。 ⑩

酒井 大岳（さかい・だいがく）

昭和10年群馬県生まれ。駒澤大学仏教学部禅学科卒業。曹洞宗長徳寺住職。南無の会会友。ナマステ・ネパール会会長。上州みすゞ会代表。昭和39年群馬県文学賞（随筆）、同56年上毛文学賞（俳句）、同58年上毛出版文化賞（『般若心経を生きる』）など受賞。